



2010年9月8日放送

漢方頻用処方解説 消風散

東海大学 東洋医学講座 張 民浩

消風散は、現代の代表的な皮膚疾患であるアトピー性皮膚炎をはじめとして、蕁麻疹や各種アレルギー性皮膚疾患、難治性の慢性湿疹などに広く使用されている漢方処方です。

消風散は、まさに「風（ふう）による病を治す薬」ということでネーミングされたと考えられます。消風散の解説に入る前に、まずは「風」という概念について簡単にご説明を致しましょう。風という漢方独特の基本概念を理解することで、「消風散」という漢方処方の特質が、より明確になると考えられます。

漢方では病気の原因を大きく外因と内因の2つに分けています。外因の中には自然界の気候や環境の変化も含まれており、これらが人体に影響して疾病を誘発すると考えています。この考えは、人体は自然の一部であり、自然界の変動に合わせて人間の体も変化するという、中国哲学の考えに由来しています。

そしてこの自然界の変化を「風・湿・寒・躁・暑・熱」の6種類に分類し、これを六淫と称しています。六淫の中で、もっとも代表的なのが風、つまり風邪です。自然界の風は吹いたり止んだり変化が速く流動性もあり、木を揺らし、物を吹き飛ばし、水面に波を立て、建てつけが悪いと家の中まで入り込んできます。

『黄帝内経・素門』風論に「風はよくめぐり、しばしば扁ず」という記載がありますが、

人体が「風邪（ふうじゃ）」に冒されると、病気が急に発症したり、しかも変化しやすく消長するなど、自然界の風の性質に類似した特徴が現れやすくなるとされています。

さらに同じく風論には「風は百病の長である」と記載があるように、風による病は他の疾患を惹起したり、六淫の別の病邪と結びついて複雑な症候を呈したりします。この「風邪」による疾患に対応できる処方が、これから解説する「消風散」ということになるわけです。

原典は中国明時代に陳実功（ちんじっこう）が著した『外科正宗』（1617年）に記載されています。原典には「風湿血脈に浸淫（しんいん）し、そうかいを生ずるに至り、搔痒絶えざるを治す。および、大人・小児、風熱、いんしん、身にあまねく、雲片（うんぺん）、斑点たちまち有り、たちまち無きを治して、並びに効あり」と記載されています。

内容ですが、「六淫である風邪に湿邪が相まって、人体内の血脈に入り込んで、皮膚表層に非常に強い痒みを伴った疾病を惹起する。この痒みを治す効果がある。また大人でも子供でも風熱による毒が全身に出現し、今ここにあるかと思えば消えて、また現れたりする、まるで蕁麻疹のような皮膚疾患に用いて効果がある」という意味です。

構成生薬は13種類の生薬から構成されています。ボウフウ（防風）・ケイガイ（荊芥）・ゼンタイ（蟬退）・ゴボウシ（牛蒡子）・セッコウ（石膏）・チモ（知母）・クジン（苦参）・ジオウ（地黄）・ソウジュツ（蒼朮）・モクツウ（木通）・トウキ（当帰）・ゴマ（胡麻）・カンゾウ（甘草）から構成されています。この中で消風散の中心となり、風邪に対応できる、すなわち去風作用の期待される生薬は、ボウフウ・ケイガイ・ゼンタイ・クジン・ゴボウシなどがこれに相当します。

ボウフウはセリ科のボウフウの根を乾燥させたもので、去風作用が期待できる代表的生薬ですが、作用として痒みをとるだけでなく、頭痛や関節痛に代表される風邪による痛みなどにも使用されます。また湿を取り除く去湿作用もあり、風湿の邪から体を守る効果が期待できます。

ケイガイはシソ科のケイガイの花穂（かすい）で、やはり去風作用がメインですが、発表、さらには止血・抗菌作用もあり、皮膚疾患の治療には欠かせない生薬です。ケイガイはボウフウとの相性がよく、同時に使用することで相乗効果が期待されます。

ゼンタイは蟬のぬけがらで、体表面の風熱を散じて痒みを取り、やはり皮膚疾患に使用されることが多い生薬です。精神安定・鎮静作用もあり、風邪、ここでは **common cold** に伴う煩躁、精神不安、さらには子供の夜泣きにも使用されます。

ゴボウシはゴボウの種子で、去風その他、解毒、解熱作用が期待される生薬です。特に化膿性皮膚疾患に有効で、ニキビなどにも使用されます。ゴボウシには通便作用もあるので、便秘がある症例では、より強い清熱解毒効果が発揮されます。

クジンはマメ科クララの根で、去風その他、解熱、利尿効果があり、夏などに悪化する滲

出性、あるいは化膿性の皮膚疾患に広く使われています。

今ご説明した原典の記載や構成生薬の特徴などから、消風散の使用目標を整理すると、「何らかの原因により皮膚表層に病変が生じ、かゆみと遊走性を有し、或いは拡大傾向があり、水疱あるいは湿潤傾向のある、発赤、熱感のある皮膚疾患」となるでしょうか。漢方医学的には「風湿に熱が加わった・風湿熱の皮疹」に、消風散は効果があると考えられます。

先人たちもこの消風散を難治性の皮膚疾患に頻用したようです。江戸時代に書かれた浅田宗伯の『勿語薬室方函口訣』には、「三十歳ほどの婦人、毎年夏になると全身に湿疹が出現し、かゆみが強く、時に分泌物が多く耐えがたい。諸医が治療を試みたが治らなかった。そこで消風散を用いたところ、1ヵ月で効果が見られ、3ヵ月できれいに治った（意識）」という記載があります。

最後に私が経験した消風散の有効症例をご提示いたしましょう。24歳の女性で、3ヵ月前から下肢を中心に浮腫を伴った蕁麻疹様の発疹が突然出現するようになり、近医皮膚科を受診し抗アレルギー剤などを処方されましたが、効果不十分ということで漢方治療を希望され受診されました。

激しい掻痒感に加え、強い発赤と熱感を伴い、走行したり入浴するとより症状が出現しやすい特徴を有し、しかし約2時間もすると自然に消失するということでした。典型的な蕁麻疹、漢方医学的には「風湿熱の皮疹」と診断し、消風散を処方したところ、徐々にではありますが、皮疹の出現する頻度が減少し、日常生活に支障がないレベルまで改善しました。